



萩東中だより

平成31年
2月22日(金)

学校教育目標

ふるさと萩を愛し、志に生きる

NO.21

◆立志式

2月14日(木)、2年生の「立志式」が行われました。たくさんの保護者や来賓の方々、そして、1年生も見守る中、生徒たちは一人ひとり自分の「志」をステージ上で堂々と発表しました。また、続く講演会では、萩一まーと駅長山口泉さん(本校第1期卒業生)から、「萩の魅力に気づく」と題して、「志」について考えさせられるお話を聴くことができました。4月からは最上級生となります。自分の「志」を実現するために、今何をすべきかしっかり考えていってほしいと思います。

以下校長先生の式辞です。

「志を立ててもって万事の源となす」

▼みなさんの志カードにあるこの言葉は、松陰先生が26歳のときに従兄弟の元服を祝って贈った「土規七則」のまとめ部分にあたる言葉です。何事をするにも志がなければ何にもならない。行動は志あってのもの。全ては志を立てるところから始まる、という意味です。

▼人が生きていく上で志のあるなしは、その後の人生に大きな違いが生まれます。松陰先生は若くしてそのことに気づき、塾生たちには機会あるごとに教諭したそうです。▼先ほどは、一人ひとりが、気持ちを込めて堂々と自分の志を宣言してくれました。大変立派であったと思います。保護者の皆様方にとっては、幼い頃の写真と見比べることで、お子様の成長ぶりに感慨もひとしおのことと思います。▼将来はこんな仕事がしたい、こんな大人になりたい、こんな生き方をしたいなど、表現の仕方は様々ですが、自分なりに考え抜いて紡ぎ出したこの「志」は、これからの人生において生徒のみなさん自身ががんばって実現をめざす目標であり、めざす自分の姿となるでしょう。▼ところで、夢と「志」はどう違うのでしょうか。夢は、自分の「あこがれ」から「なりたい自分」として描いたもの、あくまで自分を中心に描いたものです。一方、「志」は、自分ではなく、世の中のため、人のために力になりたい、貢献したいという、個人の夢を超えた、だれかの喜びにつながる「思い」、利他の精神そのものです。したがって、夢と志とでは、心のエネルギーのベクトルが逆なのです。▼人として生まれてきたからにはそれぞれに役割や使命があり、一人として無用な人はいないはず。それぞれ置かれた環境の中で人を喜ばせたり、助けたり、人に感謝されることを通して幸福を感じ、自己成長にもつながっていくのだと思います。▼今日ここに「立志の宣言」をしたということは、単なる自分の希望の表明ではありません。それはまさに、未来の自分自身に向けた決意の表明なのです。これからみなさんは、その「志」の実現に向けて、自らの「志」というフィルターを通して物事を見、本当に必要な情報を選別し、物事の本質を見失わず、適切な判断をして生きていってほしいと思います。▼自分の志が定まっていれば、日々の生活にも気力があふれ、どんな困難にも立ち向かうことができるはず。自分の運命は、心のもちようひとつで変わります。変えることができるのです。自分の人生は自分でつくる。是非とも志の火を絶やさず燃やし続けてほしいと願っています。

「今日よりぞ 幼心を打ち捨てて 人と成りにし 道を踏めかし」

▼松陰先生が、元服を迎えたいとこに、大人としての自覚を促す意味で贈った和歌です。さあ、生徒のみなさん、今日からは、親にすがって甘えるような心を振り切り、ひとり立ちした人間になるために、自分の未来に向け、力強く歩いてください。



立志のこたば発表



学年合唱「越えてゆけ」

生徒の立志のことば

- 私は、たくさんの人を笑顔にできる人間になりたいです。そのために、まず、自分が笑顔でいることが大切だと思います。悲しいこと、辛いことがあっても笑顔を消さないようにしていきます。そうして自分だけでなく周りの人も笑顔にしていきます。
- 私は限界突破という言葉大切に、何事にも諦めず挑戦していきたいと思います。部活や勉強で辛いとき、「もうだめだ」と思うのではなく、「まだできる」と自分に言い聞かせて、自分を成長させていきたいです。そして、大きく飛躍して、社会や人のために役立つ立派な大人になりたいと思います。
- 私は吸収力のある人間になりたいです。自分のことを気にとめてアドバイスをしてくれることに感謝して自分の成長の材料にできるようにしたいです。そのために人からの指摘を謙虚に受け止め聞き入れられるように日頃から気をつけたいです。

◆体験入学・入学説明会

2月8日(金)、来年度本校に入学予定の児童とその保護者を対象にして、体験入学及び説明会を行いました。3小学校から来た児童には7つの教科(国・社・数・理・英・音・美)に分かれて、授業を体験してもらいました。緊張していたようですが、それでも積極的に自分の意見を言える児童もあり、たいへん感心しました。体験授業後は、保護者ととも生徒会による学校紹介、そして学校生活の説明を受けました。

(授業を受けた児童の感想です)

- ・中学校の先生はとても怖いのかなと思っていたのですが、とても楽しかったです。数学の歴史について楽しく学ぶことができました。(数学)
- ・空気の分子が私たちの身の回りにたくさんあるということが分かりました。目には見えないのに、下敷きやペットボトルが持ち上がらないようすごい力を持っているんだなと思いました。授業はとても分かりやすく楽しかったです。今まで理科は苦手だったけど、楽しいイメージができました。(理科)



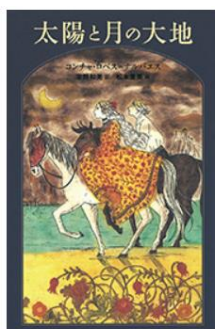
◆萩市子ども栄光賞

2月13日(水)、萩市子ども栄光賞授賞式が市役所で行われ、本校から3名の生徒(文化面では松岡灯子さん、体育・スポーツ面では工藤淳誠くん、野稻太陽くん)が受賞しました。松岡さんは読書感想文での受賞、工藤くんは駅伝での活躍、野稻くんは水泳でのこれまでの活躍が評価されてのものです。なお、萩市子ども栄光の記録は39名の生徒が受賞しています。



◆第64回青少年読書感想文全国コンクール

本年度の第64回青少年読書感想文全国コンクールにおいて、松岡灯子さんが毎日新聞社賞を受賞しました。松岡さんはこれまで、3年連続県の代表として作品が全国コンクールに出品されるなど、優れた成績を収めています。今年度は課題図書「太陽と月の大地」についての感想文が受賞しました。素晴らしい感想文なので、裏面に掲載しています。



【本のストーリー】

16世紀スペイン。キリスト教徒の伯爵令嬢マリアと、伯爵家に長年仕え友情を育んできたイスラム教徒の家に生まれた少年エルナンド。ふたりの間には恋が芽生えるが、やがて両家の人々は異なる宗教・民族間の対立に巻き込まれていく。悲惨な戦争の果てに、エルナンドは故郷を追われていく……。宗教や民族の違いによって引き裂かれ、運命に翻弄される人々を描いた歴史小説。

認め合う心から未来へ

萩市立萩東中学校 三年 松岡 灯子

どうしようもできないことが、この世界にはあるのだろうか。どんなに勤勉につつましやかに暮らしていても、大切にしたいものをただ守りたくても、悲しく過酷な選択をしなければならぬ時があるのだろうか。この本を読み進めるにつれ、私はやりきれない思いに襲われ、自分の無知と甘さを痛感した。

主従関係や信仰の違いを越え、深い信頼と友情で結ばれたデイエゴとゴンサロ。彼らの孫、エルナンドとマリアもまた、どんな状況においても、互いを思いやることのできる友情を育んだ。キリスト教徒とイスラム教徒の対立による不穏な空気が常に流れている物語の中で、デイエゴとゴンサロの出会いや、エルナンドとマリアが鳥の声を聞きながら語らい夏を楽しむ場面だけが、私の気持ちをほっとさせた。それと同時に、家柄や宗教の違いは分かり合えて、必ず友情を結ぶことはできるし、平和な社会を築くことができると思っっている私にとって、エルナンドとマリア、そして二人の祖父たちの関係は、正しく、当然のものとして映っていた。たくさんのかけがえのないものを失いながら、いつまでも対立し争い続け

る人たちを、馬鹿げていると私は心のどこかで蔑んでいた。しかし、私は何も知らず、分かっていたいなかった。長い長い争いにより、抑圧する者も、される者も、家族、仲間、土地や家財、故郷、すべてを失うこと。奴隷として売り買いされるいのちがあること。追われるようにして国を去らなければならぬこと。長い対立の中で、無かったことにはできないことがあるということ。エルナンドとマリアが直面する事柄に向き合わねばならない環境で私は生きてこなかったし、考え想像することもなかった。にもかかわらず、口先だけで平和や信頼を語り、それを脅かすものを批判してきただけではないだろうか。

アルベニーヤ伯爵に奴隷として買われたエルナンドが、伯爵一家の慈悲深さに感謝しながらも、ぬぐい難い怒り、屈辱と失望に苦しむ姿。エルナンドの人としての尊厳を守るために、くだすマリアの苦渋の決断。荒れ果てた国と人々の中で、ただ一つの希望であったであろう友情をどうにかして守りたいと思いやるエルナンドとマリアに、私の心は大きく揺さぶられた。

二人は悲しみを分かち合っている。デイエゴとゴンサロがそうだったように、エルナンドとマリアも、喜び、悲しみを分かち合い、どんな時も寄り添う真の友情で結ばれている。

エルナンドとマリアが生涯を終えるまで、イスラム教徒とキリスト教徒は理解し合えず、国家権力や支配をめぐる争いがなくなることもなかった。願っても願っても報われることはなかった。しかし、二人の友情こそが希望なのだと感じた。エルナンドがアルジェから送ったマリアへの手紙にしたためた、

「人々が違いを認め合い、相手と自分の共通点に目を向ける日が来るかもしれません。」

この言葉が、重苦しい私の心に光を与えた。互いを認め合う心は、延々と続く辛く厳しい現実にもくじけることはなかった。エルナンドの手紙は、その証だ。認め合う心と未来への願いが二人の人生を支えともし続けたのだ。

宗教や生活様式の違いから生じる問題や争いを無くしたい、解決したいと、今ここで私が叫んでも、すぐにそれを実現させることは難しいだろう。しかし、私のすぐそばにある優しさや思いやりを見過ごさず、それを大切にしていけることが、生きていく上で希望になるのだと、エルナンドとマリアの一生が私に教えてくれた。

私が生きている日常、学校生活、地域での暮らしにおいても、様々な人と出会い、いろいろな考えや思いがあって、衝突や対立というほどではないにしても、不調和を生む場面が

時にはある。家族の間でさえ、そういう時もある。その不調和をそのまま見てみぬふりをして、やり過ごすことだってある。波風を立てるのが、煩わしいだけの私がいる。困ったときは、その場の雰囲気になされるような応じ方をすることもある。しかし、私はこの本を読み、エルナンドとマリアに出会い、二人の間にある相違、宗教も家柄も生活習慣も決して調和するものではなくても、その違いを認め合うことはできて、互いを思いやることができるということを学んだ。違いの中にこそ、私たちがまだ知らない、未来への大きな可能性があるのではないだろうか。

私の未来には、たやすく乗り越えられない現実が待っているかもしれない。どんなに望んでも手に入れられないことがあるだろう。だが、エルナンドとマリアが気高く守り続けた希望を信じたい。違いを一樣にすることによって得られるものは、調和とはいえない。違いが心地よく存在してこそ、真の調和が生まれる。違いが違いのまま調和する世界で、私は生きたい。この本が教えてくれた認め合う心を胸に、精一杯過ごしていきたい。

コンチャ・ロペス||ナルバエス 著

『太陽と月の大地』

福音館書店